

院外茶話

vol.149 平成 29 年 10 月 1 日

チンチン沸き立つやかんの口
炊き立ての白いご飯
雨の中の神輿の宮入り
湯上りの浴衣姿がいい

湯気



湯気を見ると心が和む。

さんまの塩焼き！少し焦げ目がついた焼きたてのさんまに、酢橘と醤油をサッとかけて、それは美味しいこと。そのさんまに大根おろしは定番だけど、私はあまり好まない。さんまが冷めてしまうから。

煮物や揚げ物も熱いにこしたことはないが、魚の場合はどうしても焼きたてでなければならぬ。腹の中ほどに箸を入れたときに、皮がパリッと割れて、そこからほんのり上がる湯気。

美味しいものを口にするためには、何も本マグロを買わなくてもいい。さんまを熱いうちに食べればいいのである。

もう一つ、どうしても熱くなくてはいけないものがラーメン。

私はいわゆるラーメン専門店よりも、普通の中華料理店のラーメンを好む。以前は中華そばと呼んだ。

長年親しんだあっさりとしたスープの味で、ここに薄く切ったチャーシューとメンマ、のりと刻み葱でも乗っていただければそれで十分。

なるとはあってもなくてもいいけれど、彩りを考えると渦巻の紅白はいいかな。いずれにせよ具の量がこの程度ならば、湯気が立ち上がる熱いラーメンが食べられる。

でもここに、分厚いチャーシューが何枚も乗って、冷たいゆで卵ともやしと、ほうれん草が乗ったりすると、もう湯気は立たなくなってしまうのです。

わざわざ高いお金を払って、ラーメンをぬるくすることには賛成できない。この点ベストの選択はタンメンで、野菜はスープとともに温められているので、もうもうと湯気が立ち上がる。麺をすすっているうちに、鼻水が出てくるくらい熱いのがいい。



これだけ具が乗るともう湯気は出ない。

我が家では部屋にブザーがあって、朝食ができて上がるとこれがピーっと鳴る。この時1分以内に駆け付けないと、妻の大声が聞こえてくるので、ここは何をしようかと、航空自衛隊のスクランブル発進のような勢いで食卓に向かう。すると、そこにはできたての朝食が並んでいる。正確には並ぶ直前にある。

ほんのり湯気が上がる味噌汁とご飯が出てきて、ここに納豆と塩鮭でもあれば、日本人に生まれて本当によかったと思う。



酒を飲んだ翌日には欠かせない。

こうして朝食を終えると、食後の茶を煎れるのは私の役目。それは毎朝決まった動作で、まず湯を沸かして湯呑と急須、それに茶筒を用意する。中身は煎茶。

二つの湯呑に湯を注ぐと、湯気が真上に勢いよく立ち上がる。そのままじっと見ているとゆらゆらと揺れ始めて、部屋のわずかな空気の流れを受けて横になびき、やがて消えていく。

湯気がわずかに残っている頃合いで、この湯を急須に移すか、あるいは見えなくなるまで待つかは季節と気分次第。

急須の湯に茶葉を入れてまた数分。これを湯呑に注いだときの、茶の色合いでその日の出来栄えがわかる。うまくいくこともあれば失敗もあって、これで一日の運勢が決まるような気分になる。

煎茶は寒い季節の方がいい。八十八夜を過ぎて新茶が出回ると、それはまた別の楽しみがあるけれど、初夏を迎えて湯気がだんだん見にくくなる季節には、冷茶に変える。同じ頃に燗酒は冷酒に変える。

湯気を見れば温かさがわかる。

でも、実際は温かい料理と、温かそうな料理は別なもの。美味しい料理と、美味しそうな料理も別なもの。

人には好みもあるけれど、肉じゃがや大根の煮つけは、十分に火が通って味が染み込んでいる方がいい。しかし、味が染み込めるとじゃが芋も大根も形が崩れて見栄えが悪い。

味よりも見た目が大切なのはテレビや写真で、テレビならばレポーターが肉じゃがを一口ほうばって大袈裟に「うん、美味しい」、と言って見せればそれで済む。

ところが写真の方は、そう簡単ではない。美味しい肉じゃがを、美味しそうに写すのは、容易なことではない。温かい料理はすぐ冷めて、色や形も変わるので、美味しい瞬間を残すためには、撮り直しの連続。

でも本当の味はどうあれ、写真だけが目的ならば、温かそうに見えるだけでいい。

ここでプロが見せるのが、斬新なテクニック。撮影用の肉じゃがは、濃いめの味付けで芋は生煮え。だから照りがよくて、形が崩れない。

ドライアイス茶こしに入れて、料理の上からポンポンと落とせば、冷たい湯気ができあがる。上がってこようが、下がってこようが湯気は湯気。写った料理は美味しそう。

湯気の演出が最も効果を発揮するのが温泉。温泉は不純物を多く含むので、低い温度でも、もうもうとした湯気が立ち上がる。

温泉を覆うような湯気の向こうに、清流が流れて、そこにまた雪でも積もれば、最高のロケーション。

頭の上に手ぬぐいを乗せて、顎の上まで湯につかり、のぼせてきたら立ち上がる。火照った身体は雪の冷気にたちまち冷めて、また湯につかる。

こんなことを繰り返した後は、部屋に戻って熱燗で一杯。雪見障子の硝子越しに、湯あがりのいい女が見えて、まるで湯気が上がっているような。

こんなことは多分、ないだろうな一。



小早川清の「宵」